

英語版アニメ作品に見る翻訳の問題 2 : 『となりのトトロ』の場合

山 田 健太郎

On Problems of Translation in English Version of Anime 2: A Case Study of *My Neighbor Totoro*

Kentaro YAMADA

0. はじめに

拙論「英語版アニメにおける翻訳の問題：『千と千尋の神隠し』の場合」では、宮崎駿監督のアニメ『千と千尋の神隠し』と英語版（英語吹き替え版）*Spirited Away*を比較し、英語版において観察される原作との違いについて、これを翻訳の一つとする観点から、翻訳論の概念を参照しながら考察をした（山田）。そこでは、英語版 *Spirited Away* は、原作にかなり忠実に作り上げることを意図した作品でありながら、実際のスクリプトと比較すると、かなり台詞が書き加えられていることが確認された。その書き加えが行われた理由として、日本文化とアメリカ文化でのコミュニケーションにおける沈黙のあり方の違い、あるいは一般的にいわれる日本文化の曖昧性とアメリカ文化の明示性が考えられることを述べた。そして、翻訳における等価の概念から、英語版スクリプトが、異文化を越えて原作と同等の感動を、アメリカを主に念頭に置いた英語文化圏のオーディエンスにもたらすことを目指したものであることを確認した。

本論では、この論考の枠組みに沿って、『となりのトトロ』とその英語版 *My Neighbor Totoro* を分析対象とし、翻訳の問題について考察する。『となりのトトロ』と *My Neighbor Totoro* を対象とした理由は、『千と千尋の神隠し』と同様に、明確に日本を作品背景としていることが、その一つである。今日の日本人の原風景ともいえる『となりのトトロ』の世界が、異文化に受容されるべく翻訳される時、そこに顕著な現象がより多く見て取れるのではないかと考えたからである。また、草薙聡志が、『となりのトトロ』により宮崎駿はアメリカ映画批評界における一定の評価を受けるようになったと述べていること（草薙 215）、あるいは、*The Anime Encyclopedia* では宮崎駿の最高傑作とし（Clements & McCarthy）、その編者の一人 Helen McCarthy が、自分の著書でこの作品を最も好きなものの一つとして挙げていること（McCarthy 9）などから、『となりのトトロ』が、アメリカの、さらに広くは世界のオーディエンスにとって、宮崎駿の代表作の一つといえるからである。

1. 『となりのトトロ』と *My Neighbor Totoro* の成り立ち

『となりのトトロ』は1988年に『ほたるの墓』（高畑勲監督）と同時に公開された。企画書段階で60分の中編アニメーションとして始まったが（『出発点』 397-98）、実際の制作課程における変更等を経て最終的には約86分の作品となった。このあたりの事情は、『千と千尋の神隠し』が、絵コンテ段階では3時間半くらいの内容に一時膨らんだものを、ストーリー展開を変更して

最終的に約124分の作品に収めた（「自由になれる空間」26）のとはかなり異なる。中編作品の企画から始まった『となりのトトロ』の方が、さまざまな登場人物とそのサブ・プロットや伏線を複雑にかかえた『千と千尋の神隠し』よりもはるかに素朴な物語の構造をしているのは、この制作過程とおおいに関係があるといえよう。もちろん、物語構造の単純／複雑がそのまま作品の印象の弱／強に結びつくわけではない。美術担当の男鹿和雄により成し遂げられた、精密な絵画が動くアニメーションによって構築された『となりのトトロ』の世界の圧倒的なリアリティーは、宮崎ブランドともいえる作風の代表的特質の一つである。ただし、英語版への翻訳について考えるとき、この物語構造の複雑さの違いは、考慮に入れられるべきことと思われる。

作品の時代背景は、昭和30年代あるいはそれより少し以前。山間の村に草壁一家が引っ越してくるところから物語が始まる。療養のため入院している母親のそばに住むために見つけた家に、父親とサツキとメイがオート三輪に家具を積んで引っ越してくる。大きな楠がある森のすぐ傍に佇む古びた家に暮らし始めたメイとサツキは、田舎の空気の中で、母親の病気という不安を抱えながらも、のびのびと生活を始める。近代化にまだあまり侵食されていないこの土地は生命感にあふれ、メイとサツキは引越し早々マックロクロスケ（もしくはススワタリ）に出会う。10才のサツキと4才のメイは、大人には見えない自然界の様々なものが見えるのである。やがて庭で出会った小トトロと中トトロを追いかけて森に入ったメイは、楠の洞で寝ている大トトロに出会う。数日後にはサツキも、雨が降ってきたのでメイと一緒に父親を迎えに行ったバス停でトトロ（大）に会う。そこではネコバスにも出会う。

その時にトトロからもらった木の実を庭に蒔いて、芽が出るのを心待ちにしていたある夜、トトロ（大・中・小）が植えたところで不思議な儀式のようなことをしているのに気がついたサツキとメイはこれに加わり、一晩で芽が出て巨大な木が出現し、さらにトトロ（大）の出した駒に乗って風のように自由に空中を飛び回る不思議な体験をする。翌日起きてみると、巨大な木は消えていたが、庭に植えた木の実に芽が出ているのを見てサツキとメイは大喜びする。夢と現実が交錯するファンタジーの世界がここにある。

母親の病気という不安を忘れさせてくれる幸福感に浸っていたサツキとメイに、事件が起こる。父親が遠くの大学へ仕事で行っている間に、母親の入院している病院から電報が届く。動揺しているサツキの様子から危機感を募らせたメイは、自分のトウモロコシを母親に届けに一人で出かけてしまい、迷子になる。メイの不在にサツキが気づき、近所の人々を動員して近くの沼を捜索するほどの大騒ぎになる。サツキはトトロに助けを求め、トトロが呼んでくれたネコバスによって、無事メイを見つけ、ついでにトウモロコシを病院の母親のもとに届けて、遠くから元気そうな母親の姿を見て安心するところで物語が終わる。

英語版 *My Neighbor Totoro* がアメリカで公開されたのは、1993年である。劇場配給権は Troma 社が、ビデオ配給権は Fox 社が得て、アメリカ市場への供給にあたった。英語版は、それまでに『アキラ』を含めいくつもの日本アニメ作品をアメリカに紹介してきた Stream Pictures の Carl Macek が作成した。これは最初に日本航空の太平洋国際線機内上映用に作成されたもので、英語翻訳台本に宮崎の了承を得て実際の録音作業に入った。Fox 社から発売されたビデオも、1991年ロンドンでの Japan Festival で上映されたのもこの吹き替え版である (McCarthy 118-19)。日本で販売されている『となりのトトロ』に収録されている英語音声もこの吹き替え版である。

1996年にディズニー社が、スタジオジブリ作品の世界での配給権を含む提携を徳間書店と結び、現在『となりのトトロ』の新しい吹き替え版が、『千と千尋の神隠し』で抜擢された Cindy Davis Hewitt と Donald H. Hewitt による脚本で進行している。このディズニー版 *My Neighbor*

Totoro については、2004年夏に発売予定が一時発表されたが延期されて、現在のディズニー社のホームページのジブリ作品コーナーによれば、2006年春となっている。そこでは、サツキ役に Dakota Fanning など、具体的な配役も見ることができる (*Studio Ghibli-The Official DVD Website*)。具体的な吹き替え版の内容は発売されるまで知ることが難しいが、2004年に Viz 社からフィルム・コミックのシリーズで *My Neighbor Totoro* が出版されている。このコミックの著作権が Buena Vista Home Entertainment となっていて、先ほどの Hewitt 夫妻の名前が英語版作成者としてクレジットに並んでいることから (*My Neighbor Totoro (Film Comic)*)、また、*Spirited Away* の場合は、映画とコミックの台詞がほとんど同じであったことから、このコミックである程度ディズニー版の英語吹き替えの内容を類推することができる。

2. 『となりのトトロ』と *My Neighbor Totoro* の比較

以下、原作『となりのトトロ』と Fox 版吹き替え版 *My Neighbor Totoro* を比較し、その相違点について考察をする。またその際、フィルム・コミックの *My Neighbor Totoro* も適宜参考にする

2.1 映像・名前等の改変

『千と千尋の神隠し』についての論考でも述べたように、日本のアニメ作品がアメリカ市場に輸出される際に、異文化的要素をできるだけ排除して、一般大衆に受け入れやすいものにするため、作中人物の名前だけでなく、一部をカットしたり、あるいは絵の一部を差し替えたりすることは、頻繁に行われてきたことであった (山田 196-97)。中でも著しい例が、草薙が著書の中で詳細に述べている Carl Macek による Robotech シリーズである (草薙 158-161)。もちろん、作品を取り巻く事情によって、あるいは作品に対する輸入元の考え方によって、改変の程度は大きく異なる。ディズニーは徳間書店との提携で、スタジオジブリの作品の配給において、了承を得ることなくカットや改変をしないことになっている (“The Disney-Tokuma Deal”)。事実『千と千尋の神隠し』においては、顕著な変更点もなく、カオナシが No Face に変わっているくらいであった (山田 197)。

My Neighbor Totoro の場合、作中人物たちの名前はすべて原作のままである。音声は英語吹き替え版なので当然入れ替えてあるわけであるが、音響・音楽についての改変はほとんど観察されなかった。あえて挙げるとすると、オープニング・テーマとエンディング・テーマは英語の歌詞となっている。

映像上の改変も、確認されたのはわずか2箇所である。一つは、作品の冒頭のシーンで、原作のフェイド・インの部分が英語版ではカットされている。もう一つは、作品半ばでサツキとメイがカンタから借りた傘を返しに行く場面である。この場面では、カンタの母親が玄関口でサツキとメイに應對し、それを隣の部屋でカンタが、すこし照れくさいような嬉しいような顔をして聞いている。やがてサツキたちが帰ったあと、嬉しい気持ちを抑えきれず模型飛行機を抱えてカンタが部屋をはしゃぎ回る所に、隣の部屋から「誰か来たのかい？」とカンタの祖母が襖を開けて尋ねる。原作ではカンタの祖母が襖を開けるのだが、英語版では襖は開かずカンタの祖母の声だけが聞こえてくる。これは『千と千尋の神隠し』にはない著しい映像の改変である。隣の部屋から襖を開けてカンタの祖母が出現することに文化的な違和感があるとは考えにくい。数人の英語圏の知人に意見を聞いて浮かび上がってきた一つの可能性は、原作の祖母の口の動きが英語版スクリプトの台詞の音節数とうまく合わないので、口の動きが映らないように襖の向こうから話すことにした、という理由であるが、はっきりとしたところはわからない。フィルム・コミックの

この場面を参照すると、襖を開けたカンタの祖母の絵に台詞が書き込んである (*My Neighbor Totoro* (Film Comic) vol.3 38)。このことから、新しいディズニー吹き替え版では、襖を開けて祖母が話しているのではないかと思われる。もしそうであれば、その台詞と Fox 版との台詞を比較し、上で述べた説明が成り立つのか検証してみることが可能である。いずれにせよ今後の検討課題である。

2.2 スクリプトの比較

以下、原作と英語吹き替え版での主要な翻訳作業であるスクリプトを比較検討する。日本語から英語への翻訳なので、精密な議論をすれば、当然ながら言葉の選択レベルだけで数多くの箇所が考察対象となりうる。しかしアニメの英語版作成という翻訳作業の性質上、あまり細部の議論については不毛なものになりかねない。文学作品とは異なり、純粋に言葉だけの世界ではないからである。そこで、本論でも、『千と千尋の神隠し』同様、スクリプトの対比において、特に大きな違いがある箇所に絞って考察をする。スクリプトは、英語版については、The Hayao MIYAZAKI Web から入手可能な Bill Pellowe によるトランスクリプト (“Transcript: My Neighbor Totoro”) に若干の修正を加えた。<>の語句は、Pellowe が実際の発話では省略されている部分を補足したものである。原作の日本語スクリプトは、出版されている絵コンテ全集を参考に (『スタジオジブリ絵コンテ全集3』) 筆者が作成した。なお、議論で取り上げている台詞箇所をイタリクスで示した。

引用 1

Satsuki: Mei! Hide!	サツキ: あ, メイ, かくれて!
Satsuki: I thought he was a policeman. HI-I-I!	サツキ: おまわりさんじゃなかった。 おーい! 笑。
Postman: <i>Hi! Hello there!</i>	郵便局員:
(Arriving at the caretaker's house)	
Father: Sorry to bother you, but are your parents around anywhere?	父: おうちのかた, どなたかいらっしゃいませんか。
Kanta: <i>They are out there, in the field.</i>	カンタ: (田んぼを指す)
Father: Thanks a lot.	父: あ, どうも。
Father: Hello there! <It> looks like we're going to be neighbors.	父: 草壁です。引っ越してきました。よろしくお願ひします。
Man: <It's a> <i>pleasure to meet you. Good luck in the new house.</i>	男: ご苦勞さまです。
Father: <i>Thank you. <We'll> see you soon.</i>	父:
Father: (to Kanta) Thank you very much.	父: どうもありがとう。

引用 1 は物語冒頭の、オート三輪に乗った草壁一家が山間の村に引っ越してくる場面である。スクリプトを比較すると、原作と英語版でかなりの違いが見られる。まず、呼びかけたサツキに

答えて郵便局員は、原作では無言で手を振るのだが、英語版でははっきりと呼び返している。同様に、原作ではカンタがサツキの父親に家族の居所を尋ねられた時に無言で田んぼをさすのだが、英語版では仕草と同時に言葉ではっきりと説明をしている。また、田んぼにいるカンタの家族の言葉に対して、サツキの父親は、原作では何もいっていないが、英語版でははっきりとお礼の言葉を返している。またサツキの家族（おそらく父親）が田んぼから声を掛けた「ご苦労様です」は、英語版では、“<It' a> pleasure to meet you. Good luck in the new house.”と倍以上の台詞に翻訳されている。フィルム・コミックでは、原作のカンタの無言部分はそのままだが、カンタの家族は、“Why don't you and your family stop by sometime?”と田んぼから応じていて、やはりやや長めの台詞である。またそれに対して、サツキの父親はフィルム・コミックでも“Okay, sure. Good to meet you.”と返している（*Totoro (Film Comic) vol.1 12-18*）。原作の沈黙や短い言葉に濃縮されたきわめて日本的なコミュニケーションを、よりアメリカ的なコミュニケーションに置き換える傾向をここにみることができる。

引用2

Father: Everybody up.	父：さあっ、ついたよ。
Mei: Hey!	メイ：まってー。
Father: Hang on. There.	父：よっ。
Satsuki: Hey. Mei. <i>Come over here a minute.</i>	サツキ：メイ、橋があるよ。
Mei: Wow! <i>What are those little things swimming around?</i>	メイ：橋？
Satsuki: <i>I don't know. Goldfish maybe or something?</i>	サツキ：さかな。ほら、また光った。
Father: So, do you like it?	父：どうだい、気にいったかい。
Satsuki: It's terrific!	サツキ：お父さん、すてきね。
Mei: <i>Uh-huh!</i>	
Satsuki: <i>Come on, Mei. Run!</i>	サツキ：木のトンネル！
Mei: <i>Wait up</i>	
Satsuki: <i>Can we?</i>	サツキ：あの家？
Father: <i>Mm-hmm. You be careful, OK?</i>	
Satsuki: <i>Oh, sure.</i>	サツキ：早く！

引用2は、先ほどの場面が続いて、草壁一家が新しい家に到着した場面である。この場面は、台詞の内容の改変に加えて、台詞の挿入も行われている。まず、サツキとメイが橋のところで交わす会話であるが、原作での「橋」をめぐる言葉上の素朴なやり取りは、サツキがメイを近くに呼び寄せる発言と、メイが川の中に動くものについてサツキに質問にする台詞に入れ替えてある。会話はより機能的な情報のやりとりとなっているといえよう。少し先の原作でのサツキの「木のトンネル」や「家」などについても同様のことがいえる。イメージ性の強い台詞は、英語版では機能性の強いものへと入れ替わっている傾向がここにはある。そのことは、父親とサツキの会話のやり取りや、メイの台詞の挿入によってさらに強化されている。ただし、フィルム・コミック版では、この箇所は原作に近い台詞となっている（*My Neighbor Totoro (Film Comic) vol.1 21-*

28)。単純に文化の違いとはいえないようである。

引用3

Father: Dust bunnies make much more sense than ghosts.

父：そうさ。こんないいお天気に、お化けなんかでるわけないよ。

Mei: *Why?*

Father: *Well, ghosts are a lot harder to see. But when you suddenly move from a lighted room to a dark one, you can't see for a second, and that's when the dust bunnies come out. Got it?*

父：明るいところから急に暗いところにでると、眼がくらんで、マックロクロスケがでるのさ。

Satsuki: Boy, yeah! *Come out! Come out!*

サツキ：そうか！マックロクロスケでおいで

Mei: *Come out!*

Satsuki: *Come on out! Come out! Come out! Come out! Come out!*

メイ・サツキ：でないと目玉をほじくるぞ！

Mei: *Come on, dust bunnies*

引用3は、サツキとメイが、勝手口を開けた瞬間に、目の前を黒い毛糸の玉のような不思議なものが無数に逃げ去るのを見て仰天した後の場面である。考古学者であるサツキの父親は、お化けや妖怪など不思議ないきものの存在を受け入れようとする大人である。その父親からその正体が「マックロクロスケ」だと聞かされて、サツキとメイは納得して急に元気付き、「でてこい」と強がる場面である。引用の最初の原作で、父親が天気の良い日にお化けはでないといっている台詞は、英語版では、お化けは見えにくいという説明に入れ替わっている。次に、原作でのサツキとメイの、「マックロクロスケでておいて、でないと目玉をほじくるぞ！」は、英語版では“Come out!”を連呼するだけになっている。フィルム・コミックを参照すると、天気とお化けの説明は原作どおりとなっているが、マックロクロスケに出て来いというサツキとメイの言葉は、Fox版 *My Neighbor Totoro* と同様である (*Totoro (Film Comic) vol.1* 57-59)。「目玉をほじくる」という、今では日本でもややどぎつく聞こえる表現は、子供向けの作品における暴力の扱いに神経をとがらせるアメリカ社会では、受け入れがたいということであろう。

引用4

Mei: I really saw him! I'm not lying! I'm not lying.

メイ：本当だもん！本当にトトロいたんだもん！うそじゃないもん！

Father: Hey...

父：メイ。

Mei: You don't believe me.

メイ：うそじゃないもん。

Father: Mm-hmm. That's where you're wrong. I believe you're being completely truthful about this. But I also believe that you

父：うん、お父さんもサツキも、メイがうそつきだなんて思っていないよ。メイはきっとここの森の主にあったんだ。それはとても運がいい

met *the King of the Forest*, Mei,
and meeting him is a sign of
good luck. But there's no
guarantee that you'll see him all
the time. Come on. We'll have
to go back and pay our
respects.

Satsuki: *Where do we find him?*

Father: *Well, Miss Mei will find him
for us.*

Satsuki: *Yeah!*

いことなんだよ。でも、いつも会
えるとはかぎらない。さあ、まだ
挨拶にっていなかったね。

サツキ：挨拶？

父：塚森へ出っば一つ！

サツキ：

引用 4 は、メイが初めてトトロに会ったすぐ後の場面である。自分が会ったトトロの所にサツキと父親を連れて行こうとすると、以前のように茂みの中の道がトトロのいる所へ通じていないので、啞然とするメイを、父親とサツキが暖かく見守っている。ここで「森の主」は“the Kind of the Forest”と翻訳されている。宮崎駿は、トトロについて、近代化してまった日本の、それでも「どこか近代化してない、そこらへんの実に過渡期な段階でのおばけ」といっている（『出発点』 489）。「おばけ」は和英辞典で引くと、“a goblin; a ghost; a specter; a bogey”となるわけであるが（『新和英大辞典』）、同じインタビューの別のところでは、トトロはうす暗い森に住む「神様」であり、日本人のアニミズムとつながる存在としている（『出発点』 493）。宮崎の考えの中では、トトロは「おばけ」であり「神様」なのだが、「おばけ」に相当する英語では、「神様」を意味しない。それでは、「神様」から翻訳をすれば適語が見つかるであろうか。このあたりは、英語に翻訳するのがとても難しいところである。キリスト教という一神教を文化背景とする英語とアニミズムを文化背景とする日本語では、その宗教観の相違のために、一見同じものを指しそうな言葉が、そうならない場合が多くある。よく知られているように、日本語の「神」と英語の“god”では、意味が大きく異なる。谷川健一によれば、日本の神の源流をたどれば、それは「可畏きもの」（かしこきもの）であり、「畏怖の情を与えるもの」全般をカミと読んでいた。かつては風もそのような存在の一つであった（谷川 2-3）。この考えに立てば、風と深い関係を持つトトロは間違いなくカミなのだが、それは世界の成立の根源である大いなる存在の“God”ではない。多神教の崇拜対象としての“god”でもニュアンスが異なる。『千と千尋の神隠し』では、この「神」に“spirit”を訳語としてあてて、*Spirited Away* というタイトルに翻訳している。Fox 版 *My Neighbor Totoro* では、上で見たように“the King of the Forest”となっていて、これは原作「森の主」をほぼそのまま翻訳した表現となっている。しかし、再び谷川によれば、神社の原型となる祭場と墓地にはモリと呼ぶ場所が多い（谷川 15）。モリはしばしばカミの場所である。事実この後、原作でサツキの父親は「塚森」に「挨拶」に行くといっており、この後の場面でも明らかなように、これは神様への参拝である。この訳語でモリとカミに関わるニュアンスが果たして伝わるであろうか。フィルム・コミックでは、ここは“one of the spirits of the forest”となっている（*Totoro (Film Comic) vol.2* 119）。ここで“spirits”が複数形になっているのは、トトロが大・中・小といるからであろう。しかし、しかしこの表現では、数多くの精霊の一つともとれる。三位一体ではないが、この場面は一つの存在としてのトトロだと思うのだが、数の概念が曖昧にならない英語への翻訳はなかなか難しいようである。Fox 版に話を戻せば、父親が場所を知っている「塚森」に挨拶に行くという原作の話が、メイに先導してもらってトトロ

に挨拶に行くという話に変わっている。ここは日本の宗教的風土をあまり強く伝えない翻訳となっている。

引用5

Satsuki: Wow, what do we do now?
(Prays) If it's not too much trouble, could we stay until it stops raining?

(Kanta walks past with an umbrella, sees Satsuki, and turns around)

Satsuki: Uh ...Thanks.
(Kanta leaves the umbrella on the ground and runs off)

サツキ：うん。でも，困ったねえ。お地蔵様，ちょっと雨宿りさせてください。

(カンタが傘をさして通り過ぎるが，サツキを見て戻ってくる)

カンタ：ん

サツキ：あ

カンタ：ん

さつき：あ

カンタ：ん

サツキ：でも

サツキ：あっ

(カンタ傘を地面に置いて走り去る)

引用5は、物語の中ほどで、サツキとメイが学校から帰る途中で土砂降りになり、傘がなくて困り、地蔵堂で雨宿りしているところに、カンタが通りかかって傘を貸す場面である。スクリプトだけでは場面の様子が伝えにくいだが、ここではめずらしく、原作の台詞が英語版で削除してある。これまで見てきたように、原作の日本的な言葉数のやや少ないコミュニケーションを、アメリカ的な考えや気持ちをはっきりと表現しあうコミュニケーションに翻訳するために、英語版で台詞が書き加えられることが多い中で、興味深い例である。考えられるのは、丁寧に話すのではなく「ん」としかいわないカンタの台詞が、アメリカ的コミュニケーションの慣習ではかなり無作法で印象が悪いと判断された可能性である。原作の映像でカンタの口は動いていないのであるから、無難な会話を交わす台詞と入れるのは不可能なので、いっそのこと無言としたのではないかと考える。

引用6

Satsuki: (calling to a farmer) I'm sorry to bother you, but you, well you haven't seen a little girl come by this way, have you? She's my sister, about 5 years old.

Farmer: Well, <it> seems to me I remember someone. Ah, yes, uh,

サツキ：(農夫に話しかける) すいません，おじさん。あの，この道をちいさな女の子が通らなかったですか。私の妹なの。

農夫：さてね，女の子。見たら気が付いたろけどな。

near as I can recall, she went that way.

Satsuki: *(to herself) Maybe she went through the forest.*

Farmer: *Then again, she might've gone in the other direction. Are you sure it was your sister? All sorts of folks come by here, but I don't see them.*

Satsuki: *(to herself) Mei, I'm scared.
(to Farmer) Thank you.*

サツキ：こっちじゃないのかしら。

農夫：たしかにこっちに来たのかい？

サツキ：わからないの。

引用6は物語の最後の山場でメイが行方不明になった場面である。サツキは必死に探し回り、農作業をしている男に話しかける。ここでは原作と英語版がかなり異なっている。まず、4才の設定になっているはずのメイの年齢を、英語版でサツキは5才といているが、これは原作にはない。さらに原作では、農夫は誰も見なかったといているが、英語版では、曖昧な記憶で女の子の行った先をサツキにいい、さらに方向を訂正している。さらに、英語版では、このシーンの最後でサツキが自分の不安を独り言として口に出しているが、原作ではこれはない。フィルム・コミックでは、この場面は原作にかなり忠実な翻訳となっている (*Totoro (Film Comic) vol. 4 60-63*)。翻訳者の明示表現へのやや強い志向が表れているといえよう。

引用7

Satsuki: *Totoro, I beg you, please protect Mei. She'll be lost, and probably scared. Please believe me, I'll be good for the rest of my life if I can just see her again.*

サツキ：お願い！トトロの所へ通して！もうじき暗くなるのに、あの子、どっかで道に迷ってるの。

引用7は、いよいよクライマックスの、トトロにサツキが助けを求めに行く場面である。ここでも、原作と英語版の台詞が大きく異なる。まず、原作では、ここでサツキが話しかけているのは、トトロへと到る木のトンネルをつくる茂みであるが、英語版では、サツキはどこかにいるトトロに話しかけ、メイを守ってくれるように頼んでいる。さらに英語版では、「もしも無事に妹が見つかったら、一生いい子でいるから」と半ば交渉をするような願い事をしているが、この部分は原作にはない。フィルム・コミックのこの場面では、“Let me in to see Totoro.”が二回あり、“It's an emergency.”という緊急性を明確な言葉で表現した台詞が書き加えられているが、全体の趣意は原作のままである (*Totoro (Film Comic) vol.4 88*)。ここもまた、やや積極的な翻訳者の意図が読める。

3. まとめ

以上『となりのトトロ』とFox版 *My Neighbor Totoro* のスクリプトを比較し、特に際立った違いのある箇所をいくつか取り上げて考察をしてきた。これらのほかにも数行単位の興味深い改変が英語版にいくつも見られる。例えば、猫バスがサツキをメイのところに連れて行く時と、さ

らにメイとサツキを七国山病院に入院している母親のもとへ連れて行く時に、英語版では猫バスが行く先を自分でアナウンスしているが、原作では猫バスは話さない。バスの前面についている行き先の表示が回って「メイ」、そして「七国山病院」となるだけである。原作では話さないキャラクターがしゃべると、ずいぶんと印象が異なるが、英語圏のオーディエンスには、日本語で書かれた行き先表示を読むことは期待できない。そこで苦肉の策としてこの方法が取られたと考えられる。*The Anime Encyclopedia* の *My Neighbor Totoro* の項目には、この箇所がわざわざ取り上げられていて、その説明によると、この吹き替え版が作られたのは1989年で、当時はデジタル技術でこの表示を英語に書き換えることができなかったからとなっている。フィルム・コミックでは、猫バスの行き先表示が、最初の森の中のシーンでは日本語だが (*Totoro (Film Comic) vol. 3* 68-71)、このシーンでは英語になっている (*Totoro (Film Comic) vol.4* 99-125)。新しいディズニー版ではどのようになっているのか、楽しみである。

これまで取り上げた場面は、Fox版 *My Neighbor Totoro* における翻訳の問題を典型的に示しており、他の箇所にある細かい改変も、ある程度同じ種類のものとしてまとめることができる。その問題の一つとして、挨拶など日本独特のコミュニケーションのアメリカ的コミュニケーションへの変換が挙げられる。原作の、少し昔の日本の田舎で交わされる言葉のやりとりは、日本的な謙遜や遠慮などの情緒を多く含んだものであるため、直訳では意味が伝わりにくい。また、岡部朗一も指摘している、日本人のコミュニケーションにおいて有効に機能する沈黙 (岡部 168-172) も、まだ近代化していない日本社会であれば、生活に浸透している。英語版においては翻訳の一つの選択として、これらを原作にあるままの形で翻訳作品に移し変えることをせず、沈黙をアメリカ的コミュニケーションの潤滑油のような言葉で埋め、含意の多い挨拶を情報や意図を明示的にやり取りする言葉に置き換えている。コミュニケーションの成立において原作と翻訳作品が等価になるように、言い換えれば、原作の中にある日本的コミュニケーションにおける心のやりとりが、英語版が主に想定しているアメリカの人々にとって同じ程度のもと感じられるように翻訳がなされているといえる。

次に挙げられるのが、日本文化を背景とした独特な概念や価値観の英語への移し変えである。トトロはどのような存在なのか。森はどのような場所のイメージがあるのか。これらを翻訳することはある意味でコミュニケーションよりも難しい問題である。日常のコミュニケーションについては、異文化間でそのパターンが異なっても、そこでやり取りされる意味は、かなりの部分共通するものがある。しかしながら、宗教観や風土に根ざした価値観は、その対応物が異文化間がないことがほとんどである。とりわけ日本文化に広く浸透するアニミズム的感覚は、対応物がキリスト教文化を中心とする欧米文化圏にはない。文化の異質性を保ったまま伝えるのか、本来の特質を多少減少させてでもオーディエンスに受け入れやすいものとするのか、翻訳者が選択を迫られるところである。トトロを“the king of the forest”と訳すか、“one of the spirits”とするか、このあたりに翻訳者が苦心する様うかがえる。

これは数量的データを取ってのことではないが、『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』を比較すると、『千と千尋の神隠し』の方が、英語版での台詞の書き換えや追加がはるかに多い。もちろん、作品自体が長いということもあるのであるが、英語版 *Spirited Away* においては、作品最終部を含む原作の沈黙の場面への台詞の書き込みが多だけでなく、愛のテーマの前景化や千尋が両親を心配する気持ちの表面化など、翻訳者の積極的な説明、解説あるいは解釈がそこでは見られた (山田 202-204)。『となりのトトロ』においては、これまで紹介したように、翻訳者によって原作に加えられた改変ははるかに少なく、なおかつ目立たないものとなっている。もちろん、翻訳者の主張や考えで、原作と英語版の言葉の量のバランスや、表現の加工の程度が異

なることは当然である。しかしながら、*Spirited Away*の吹き替え版台本は、ディズニー版 *My Neighbor Totoro* の吹き替え版台本を担当する Hewitt 夫妻によるものであり、フィルム・コミックからみる限りでは、これまで紹介してきた場面でもあきらかなように、そちらの方が Fox 版よりも原作に近い仕上がりであることが予想される。ここから判断すれば、この違いは翻訳者の個性の問題とはいえないようである。むしろ、先に述べたように、それぞれの作品の物語構造の複雑さの違いと大きなかかわりがあるように思われる。『千と千尋の神隠し』の英語版制作においては、錯綜する複雑な物語によってアメリカのオーディエンスが強い違和感を持たないようにという配慮が、翻訳過程での、時には大胆な原作にない要素の導入にいたったということであろう。一方、『となりのトトロ』の英語版制作においては、すくなくとも物語の構造に関しては、そのような配慮は必要がなかったと考える。アニメ作品の英語版制作という翻訳作業においては、オーディエンスにとっての解りやすさが一つの重要な問題となる。したがって原作の物語の構造という要素も複雑に関係するのである。

The Hayao MIYAZAKI Web に掲載された第2回目の Hewitt 夫妻とのインタビューにより、英語版制作過程のかなり詳細な部分ができるようになった。それによると、まず別の人物（ここでは Jim Hubbert）が原作台本を英語に翻訳したものと、日本語字幕付きのビデオを受け取る。このビデオを見て理解しにくい部分について翻訳台本を参照し、全体を把握した上で、明確にしたい点や強調したい点について Hewitt 夫妻で議論をする。次にスクリプトを書く作業にはいる。その際、行ごとに台詞の音節数を確認し、3・4種類、ときには10種類に及ぶ別案を作りながら進む。とりあえず一通りスクリプトが完成したところで、ディズニーとスタジオジブリにそれを送り、スタジオジブリで数名のチームがこれを検討し、修正案を返送する。これを受けて、Hewitt 夫妻がスクリプトを書き直し、再びスタジオジブリに送る。このプロセスを数回繰り返して最終的なスクリプトに仕上げる（“A Second Interview with Cindy and Don Hewitt”）。ここに、ディズニー体制のもとでの吹き替え版制作の綿密な作業の様子をうかがい知ることができる。ディズニーは『となりのトトロ』を含めたスタジオジブリ作品の吹き替え版制作にあたり、「Aクラスのタレント」をそろえているようであり（“The Disney-Tokuma Deal”）、ディズニー版の公開が大いに期待される。Fox 版との比較もぜひ試みたい。ただし、上の Hewitt 夫妻とのインタビューに書き加えられた Rick Dempsey の言葉として、Carl Macek の吹き替え版はすばらしいできで、Fox 版の権利が取得できなかったので、新しく吹き替え版を制作せざるを得なかったと述べていることにここで触れておくべきであろう。もちろん、社交辞令という可能性も否定はできないが、ディズニーから新しく吹き替え版が制作されるのは、Fox 版の質に問題があるからではない。それぞれに原作の翻訳作品として独自の価値が認められるべきであろう。

『トイ・ストーリー』をはじめ数多くのヒット作品を発表し続ける、アメリカの代表的アニメーション監督・プロデューサーのひとり、John Lasseter は、スタジオジブリ絵コンテ全集の小冊子で、『となりのトトロ』から「ペーシング」という、物語の展開を学び、それを『トイ・ストーリー2』に取り込んだと述べている（「英語でなくても楽しめる作品」）。浜野保樹が述べているように、戦後の日本におけるアメリカ文化の大量輸入があった一方で、黒澤明監督の作品をはじめ日本の映画はこれまでしばしばアメリカ映画によって「模倣され」てきた（浜野 8-92）。文化はこのようにお互いに影響しつづけている。本稿では、日本文化とアメリカ文化をきわめて異なる文化としてみる立場に立ち考察を行ってきたが、共通する文化価値観があることはもちろん、それぞれの文化価値も決して不変ではない。日本文化のアメリカでの日本文化的な価値観についての理解が広がれば、やはり翻訳の在り方も当然変わってくるものと思われる。アニメにおける文化の交流という側面と翻訳の問題との関連については、今後の課題としたい。また、吹き替え

版とサブタイトルの翻訳としての比較考察も今後の課題である。

引用資料

(1次資料)

映像資料

『となりのトトロ』. 宮崎駿監督. プエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント, 2001.
My Neighbor Totoro. Dir. Hayao Miyazaki. Adapt. Carl Macek. Fox Home Video, 2002.

文献

宮崎駿. 『スタジオジブリ絵コンテ全集3 となりのトトロ』. 徳間書店, 2001.
My Neighbor Totoro (Film Comic). 4 vols. Original Story and Screenplay Written and Directed by Hayao Miyazaki. English Translation by Jim Hubbert. Unedited English--Language Adaptation by Cindy Davis Hewitt & Donald H. Hewitt. Film Comic Adaptation by Yuji Oniki. Viz, LLC, 2004.

(2次資料)

文献

『研究社 新和英大辞典』 第5版 2003.
岡部朗一. 『異文化を読む一日米間のコミュニケーション』 南雲堂, 1988.
草薙聡志. 『アメリカで日本のアニメは、どう見られてきたか?』 徳間書店, 2003.
谷川健一. 『日本の神々』 岩波書店, 1999.
浜野保樹. 『模倣される日本—映画, アニメから料理, ファッションまで』. 祥伝社, 2005.
宮崎駿. 『出発点[1979~1996]』. 徳間書店, 1996.
—. 「自由になれる空間—『千と千尋の神隠し』を語る」. 『ユリイカ』 8月臨時増刊号 24-37.
山田健太郎. 「英語版アニメにおける翻訳の問題: 『千と千尋の神隠し』の場合」. 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要 第5号, 195-205.
ジョン・ラセター. 「英語でなくても楽しめる作品」. 『スタジオジブリ絵コンテ全集3 となりのトトロ』. 月報2001年6月, 2-8.

Clements, Jonathan., and Helen McCarthy eds. *The Anime Encyclopedia: A Guide to Japanese Animation Since 1917*. Berkeley: Stone Bridge Press, 2001.

McCarthy, Helen. *Hayao Miyazaki: Master of Japanese Animation: Films, Themes, Artistry*. Berkeley: Stone Bridge Press, 1999.

オンライン資料

“The Disney-Tokuma Deal.” *The Hayao MIYAZAKI Web*.

<<http://www.nausicaa.net/miyazaki/disney/>>.

“A Second Interview with Cindy and Don Hewitt.” *The Hayao MIYAZAKI Web*.

<http://www.nausicaa.net/miyazaki/interviews/hewitt_interview2.html>.

Studio Ghibli-The Official DVD Website.

<<http://disney.go.com/disneyvideos/animatedfilms/studioghibli/studioghilibldvd.html>>.

“Transcript: My Neighbor Totoro.” *Bill's Place: Bill Pellowe's Homepage*.

<<http://www2.gol.com/users/billp/totoro/script.html>>.